育成 モノづくり人材 Vol. 5

名古屋市立工芸高校

実業の厳しさ学ぶ専門教育

名古屋市立工芸高校は2017年に100周年を迎える伝統校。卒業生は2万人以上で、地元企業の信頼は厚い。14年度は卒業生270人中、自営を含め143人が就職し、求人倍率は6・76倍だった。女子生徒が多いのも特徴で、インテリア科、デザイン科、全国に5校しかない印刷専門のグラフィックアーツ科で7―8割、全校で4割を占める。

各科とも「将来の進路を決めた受験生がほとんど」（石原正道校長）。その期待に応え専門教育を重視する。

石原校長

【DATA】▷校長＝石原正道氏▷所在地＝名古屋市東区▷学科構成＝都市システム科、建築システム科、インテリア科、デザイン科、グラフィックアーツ科、電子機械科、情報科▷総定員＝280人▷主要設備＝金属加工機械、木工機械、試験機、印刷機、コンピューターなど▷主な進路＝就職は愛知県などの主要企業各社。15年4月の進学実績は国公立大3人、私立大57人、専門学校59人

就職コースなら3年間91単位の半分近くが専門科目。企業を経験した教員も各科にいて実践的な授業を心がける。資格取得や競技会参加も盛ん。13年独ライプチヒの技能五輪国際大会にはOB3人が出場した。

製造業が集積する愛知県の地の利も生かす。2年生全員の3日間の就業体験は10年以上続き、協力企業は160社以上。学校にも企業技能者らを年20―30人招き、累計約100時間の技術指導や講義を受ける。映画や写真の制作実習では名古屋市立大学芸術工学部の授業にも参加する。

地域とのつながりも強い。市の依頼で教育委員会のホームページやいじめ撲滅PRグッズ、地元イベントのポスターなどを生徒がデザインしている。中学校の下足箱や小学校の被災時用かまども製作。近隣商店街では11年に提案したゆるキャラ「おおぞねこ」が定着した。コンペや発注主のダメ出しで実業の厳しさも学んでいる。

▲家具製作の指導を受けるインテリア科の生徒

モノづくりは日進月歩。多様な経験をさせ、問題を解決する知力、時代の変化に対応する感性、職業人に不可欠な倫理観、コミュニケーション力なども伸ばす方針だ。教員らは「自分の道を自分で考え、選択し、歩んでほしい」（同）と願っている。

（名古屋編集委員・村国哲也）

（金曜日に掲載）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社